

第32回夏期福音特別集会 第2回集会（伊東）

聖霊の力

——マルコ伝第4～7章——

1985年7月27日

小池辰雄

百行一死に如かず 罪の赦しの中へのバプテスマ 時は満ちた 福音の中に信住する 行為を
もって身証せよ 行為をもって身証せよ

●神の懷の中に

何しろ、福音書の各頁でキリストにでつくわすんだから、私は圧倒されて、話にならないです。4章から7章までの間で自由にお話させていただきます。この内容は『無者キリスト』にも書いてありますので、またご参考にお読みください。マルコ伝4章35節。その前に譬話がありますが、譬話はマタイ伝が非常に詳しいですから、マタイ伝をする時に譲ります。

³⁵その日、夕になりて言い給う『いざ彼方に往かん』³⁶弟子たち群衆を離れ、
イエスの舟にい給うまま共に乗り出づ、他の舟も従いゆく。

弟子の方が遅く来た。

³⁷時に烈しき颶風おこり、浪うち込みて、舟に満つるばかりなり。

本当に沈みそうになるわけです。一生懸命で水をかい出したかなんかは知りませんが。ところどころ

³⁸イエスは艫の方に茵を枕として寝ねたもう。

イエスは舟の後ろの方に茵を枕として寝ていらつしやる。東洋でも第一級の坊さんはそういう境地に入れる人がありますが、キリストは超特級ですから。神の腕を枕に神の懷の中に入って、舟が即ち神の懷みたいなものです。キリストは自分を神さまに全托なさると、もう波がこれに勝てない。大変な霊止です。

祈りというのは、こういう一句です。キリストは嵐の中の舟の中で寝ている。キリストの眠っている姿には全身に神の力が宿っている。だから、我々も、どんな問題があっても、休むときには、キリストの中に

「主様、あなたのみふところに寝ます」

と言って寝れば、どんな問題も全部すつ飛ばされてしまう。そして、翌朝は力をもって起き上がる。相対的な現実には打ち勝つ根源の神的な現実、天国的な現実、これを即、受けと



つていくことです。全く「即」の世界です。電車の中であろうとどこであろうと、即祈る。長い時間は要らん。グーッとその中に入る。そして、忽然として力が来る。その秘訣が本当に八方破れの世界なんです。

●参りました！

信仰の世界は、この世の計算をしていたらダメです。神さまの世界の数字は違う。これは今日やるところにも出て来ますけれども。キリストの、それから直弟子たちの、特にペテロ、ヨハネ、パウロ、それにステパノは勿論そうですが、この次元は今のキリスト教ではない。どうぞ、その秘訣を――私なんか散々遠回りしてやっと辿りついたんだが、あなた方はもうこの「即」の世界に直々にそういう福音に接しているんですから――いい加減にしていたら勿体ない。

超、常識の世界だ。何も非常識をしろというんじゃない。福音の世界は常識を乗り越えた世界ですから、常識以上のことが満たされていく。

嵐の中で舟板を枕にして眠っているという、その姿が既に波を制している姿です。本当の勇者の姿。だから、弟子たちがその姿を見て、

「参りました！」

と、同じくキリストのわきに眠るなり、平伏すなりしたら本当に弟子なんだが、まだ弟子になっていない。「亡びますから」とうろたえてしまっているから。

³⁸弟子たち呼び起こして言う『師よ、我らの亡ぶるを顧み給わぬか』

「先生、我らの亡ぶるを顧み給わぬか」

なんて、そんなとんでもない質問をしている。キリストの姿を全然見損なっている。

「眠っているとは何事か」

なんて、とんでもない。本当は、

「沈むなら、先生と一緒に沈もう」

というくらいの気持だ。

³⁹イエス起きて風をいましめ、海に言い給う『黙せ、鎮れ』乃ち風やみて、
大いなる風となりぬ。

大変な霊言です。即、静まってしまった。大変なカタです。それが物理法則でどうなるこ
うなる、なんて考えることはない。こういうところを読んで、

「本当に参りました！」

と平伏す。それが「降参する」ということです。

「信仰とは何ぞや？」

もへつたくれもない。「参りました」と言つて平伏せ。そしたら、キリストが

「よし！」



といって、もうそこに信仰が入ってくる。なんにも難しくない。

●己を否とする

40 かくて弟子たちに言い給う『なに故かく臆するか、信仰なきは何ぞ』

「なぜ、信仰をもっていないか」

と。「なぜ信仰がないか」ということは、

「なぜ、私を信じないか。なぜ、私を受けとらないか。なぜ、私を身体で受けとらないか」

ということ。「信仰なき」とはそういうことです。信仰は「サムシング」じゃない。相手を受けとること、キリストという相手を100%に受けとることが「信」なんだ。こつち側に「信仰」という何かがあるんじゃない。「信仰なき」という言葉が、ヘタすると、躓きになる。

「なぜ、私を本ものとしないか」

ということなんだ、もうひとつ別な言い方をすると。

「私はまだ信仰が薄い」

とか言って、信仰を何か秤はかりでもって計ろうとする。

「まだ軽い」

だとか、

「もつと重くなろう」

だとか。こつちには何もない。有るのはキリストの実力だけなんです。

「なぜ、私を然りと言わないか」

と。「言わないか」どころじゃない。

「然りなる私の中に入って来い。信入せよ」

ということ。「信仰」なんて仰ぐんじゃない。信入、信じ入る。信交、信じ交わる。信行、即行ずる。仰ぐばかりでいるから困る。「信仰」という言葉は、本当は誤訳なんだ。ヘブライ語でもギリシャ語でもそれは「まこととする」という言葉です。

「相手を本ものとする」

ということ。

「相手に対して『然り』と言って、己を『否』とする」

ということですよ。「信仰」という「サムシング」じゃない。ところが、キリストが

「汝の信仰、汝を救えり」

なんて仰るもんだから、

「さあ困った」

と、ああいう言葉にまた躓く。「汝の信仰、汝を救えり」とは、

「お前は私を本当として受けとったから、それが救いとなった」



ということなんです。私の言うことがうそだか本当だか、自分で体験してみてください。

●「はいっ」と返事

「なに故、臆するか」

と。信仰の世界は、疑いと恐れが禁物です。

「哲学の始めは疑いだ」

なんていう言葉もあるけれども、信仰の世界は疑いと恐れが禁物です。

とにかく子供や生徒が、先生やお父さんお母さんに

「はいっ」

と、そう答えることが信仰の第一歩なんです。この頃の子供は、直ぐ考えて、何のかんの言う。即答しない。私たちは小さい時から、「はいっ」と返事をするをはつきりとお母さんから学んで来ました。私は、父は五才の時に亡くなっているから、母に教育された。

「返事が『はいっ』とはつきり言えないのはダメだ」

と教えられた。そこから本当は始まらなくてはいけない。

これはもう胎教からだけでもね、教育は。それから、保育園、幼稚園。小学校でもう、その人間の土台は決まってしまう。もう中学になると、本当は遅いんだ。だから、中学、高等学校の先生は骨が折れるわけだ。そこで、なおひっくり返すことのできるのは、福音の力の他にない。

本当は吉田松陰式な塾が、学校の代わりにそこらこらに——文部省なんか認可されなくたっていい——

「本当の人間をつくつてやる」

というのが出てきてもいいわけだ。日本は、規格が多すぎる、規格版が。規格的な、類型的な人間が多い。人格は、神さまが一人一人を天下一品に造っている。非常に問題な青年だって、これがひっくり返ったら凄いことになる。やっかいな奴ほどひっくり返ったら、凄いことになる。

「人には^{あた}能わねど神は^な為し給う」

と。それこそ、神なんだよ。神に即する。

「即神即主」

と、いつか私は書いた。主に即するわけだ。主に即するところから、電光石火に即行が出てくる。即主即行といつてもいい。そういう福音だ。

41 かれらいたく^{おそ}懼れて互いに言う『こは誰ぞ、風も海も^{したが}順うとは』

「こは誰ぞ、風も海も^{したが}順うとは」

なんて、ただ、現象を不思議がついているくらいじゃダメなんだ。こういう驚くべき力が働いているキリストの前になぜ平伏さないか。キリストという方の中には聖霊が充満してい



る。御霊の力、神の力が。

「福音は言葉ではない。力である」

と、パウロの書翰の中には「力」ということがいっぱい出てくる。キリストの力で彼は溢れているもんだから、「力、力」と書いてある。コリント前書の第一章から書いてある。

「十字架は私たちには力である」

と。私たちは

「エン・クリスト」（キリストの中に）

だが、キリストは

「エン・テオー」（神の中に）

である。ですから、中にあれば本当の力が来る。

● 汝の信仰汝を救えり

それから、ブタの話があるけれども、これも大変なことだ。「レギオン」というほどのたくさんの悪鬼をとうとうブタの中に入れてしまった。

それから、ヤイロの娘の話と、12年間血漏を患った女の話がまん中に挟まっている。マルコ伝5章21節、

21 イエス舟にて、またかなたに渡り給いしに、大いなる群衆もとに集まる、
イエス海辺に在せり。 22 会堂司の一人、ヤイロという者きたり、イエスを見て、
その足下に伏し、

これは、さすがに態度がいい。

23 切に願いて言う『わが稚なき娘、いまわの際なり、来りて手をおき給え、
さらば救われて活くべし』

「私の稚ない娘が

十二才だったね

もう死にそうです、来て按手してください、そうすれば救われて生きます」

と、非常に単純な良い信仰です。

24 イエス彼と共にゆき給えば、大なる群衆したがいつつ御許に押し迫る。

25 ここに十二年、血漏を患いたる女あり。 26 多くの医者に多く苦しめられて、
有てる物をことごとく費したれど、何の効なく、

医者に苦しめられたと書いてある。

27 イエスの事をききて、群衆にまじり、後に来りて、御衣にさわる、 28 『その

衣にだに触らば救われん』と自ら謂えり。

それくらいに12年間血漏の女はキリストのことを聞いたもんだから、後に来たりて御衣に触った。



²⁹ 斯^{かく}て血の泉、直ちに乾^{かわ}き、病のいえたるを身に覚えたり。³⁰ イエス直ちに能力^{ちから}の己より出^いでたるを自ら知り、群衆の中にて、振り反り言いたもう『誰^たが我の衣に触りしぞ』

その女性が触つたら——キリストは初め知らなかった——ところが、キリストは力がスーッと移っていくのが分かった。「イエス直ちに」と、これも直ちに、即です。

「誰が触つたかね」

と、じつと見回された。

³³ 女おそれ戦^{おの}き、己が身になりし事を知り、来りて御前に平伏し、ありのまを告ぐ。³⁴ イエス言い給う『娘よ、なんじの信仰なんじを救えり、安らかに往け。病いえて健やかになれ』

これです。

「娘よ、なんじの信仰なんじを救えり」

「お前は、私の衣に触つても治ると、私にそれほどにまでに信じ込んだか。それが救いとなったよ」

と、こういうことです、「汝の信仰」とは。

癒されるということが、方々に出ている。いろんな場合がある。盲人の目が開いたり、唾^{わし}がものを言ったり。福音書の中にはイザヤ書35章のことがどんだん起きているんだ。天国的な現実を現じてキリストは歩いていった。その現象を起こすもとの人、キリストそのものを——癒されたから、それは感謝していいけれども、癒されなくても癒されても——「この人は」といって、そのキリストを100%に受けとっていく。これだけが本当の信だ。躓いても転んでもいいから、滑つてもいいから。そうすると、自分の中に力が入って来る、聖霊の力が。このようにキリストを無条件に受けとっていくと、

「ああこういうことか」

といって皆さんは自分でわかる。説明にならない、信仰の世界は。あんまり説明すると、逆に躓きになる。

「どうだろうか、こうだろうか？」

と、いろんな場合を考えたりする必要はない。どうせ、地上では計算は合わない。天界に行つてはじめて本当の計算が合う。地上で計算が合うことはろくなことじゃない。

●楽音

いいですか。癒された人はどうするんですか。いよいよキリストの証びとなり、キリストの力を人に分けていけないで、どうするんですか。癒されて、

「感謝。おしまい」

なんて、そんなのは信仰でもなんでもない。



「なるほど、私を通してキリストが現象なされた。その現象の力、その元の力にいきましよう」

と。そして、今度は、自分を通してキリストが不思議なことをなさる。それは、キリストを生きていればそうなっていく。これが、

「根源現実を受けとっていく」

ということ。或いは、

「根源現実を本当に体得していく」

ということ。そういう、キリストの力、聖霊の力、それが身について来ますと――これは「身につく」といったって、蓄電池じゃない――しょっちゅう電源と通じていなければダメです。「だいたい蓄えた」なんて、そんな蓄えた蓄電池なんてのはだんだんダメになるから。電源と通じていなかったらダメです。切れたら、即、つながなくては。即つなぐことができるのは、祈入、祈り入る祈りです。自分を投げ入れる祈り。それも、簡単に

「主さま!」

という一言でいい。この一言が――何も声を発しなくたっていい、沈黙の一言で構わない――それでパツと入る。

「呼んだけれども、キリストは聞いているだろうか」

と、そんなんじゃない。呼ぶと即、電気よりか速いんだ、霊氣の世界は。

「そういうようなことになったら、もう楽でしょうがない。私は本当に楽でしょうがない。どうしてこう楽だろうな」

と。本を読んでも、何をして、ものを書いて。福音でなくて、楽音^{らくいん}だ。力音でもいいよ、力の音だ。

まあ、やつと80才になってそんなことを言ってるんだから、ダメだよ。あなた方はもつと若いんだから、勿体ない。私は鈍器だから、鈍器晩成というわけで、これから少なくとも20年は生きないというのと、或る仕事は納まらない。神さまは必ずさせてくださる。ボケやしないよ。聖霊の証しをしてやるから。80才から仕事をしようなんて奴はあんまり居ないだろうね。

「それでは私もゆつくり80才まで待つていましょう」

なんて、勿体ないから、早くやつてください。早いほうがいい。

12年の血漏を患っていたのが、即なおってしまったじゃないですか。これも本当に「即」の世界です。マルコ伝はすごいんだ。マルコ伝に限りませんけれども。四福音書に渾然としていますが、こういう所をじつと祈り心で読んでみると、異言が突発したりする。

「異言とは何だろうか、異言を求めようか」

なんて、求めようかもへったくれも要らん。本当に読んでいてごらん、身体で。身読したら爆発して来るから。



● 懼るな、ただ信ぜよ

³⁵ かく語り給うほどに、会堂^{つかさ}司の家より人々きたりて言う『なんじの娘は早や死にたり、いかでなお師を煩わすべき』³⁶ イエスその告ぐる言を傍^{かたえ}より聞きて、会堂司に言い給う『懼^{おそ}るな、ただ信ぜよ』

人々が来て、

「あなたの娘はもう死んだ。もう先生を煩わす必要はないでしょう」

なんて言った。これをかたわらで聞いていたキリストは、

「会堂司に言い給う」

という所に、ここにも

「直ちに」

というギリシャ語がついている。キリストはギリシャ語じゃない、アラミ語だ。直ちに言い給う、

「懼るな、ただ信ぜよ」

と、素晴らしいね。

「こわがるな、ただ信ぜよ」

と。「こわがるな」じゃない、本当は「恐れなし」というんだ。

「恐れなんかないぞ、お前には恐れはない」

と。福音の世界は、「すべしすべからず」の世界じゃない。現実とその世界をバツと言う世界です。

「お前には使命がある。神さまは愛している」

と、どんな放蕩息子にもそう言つてやればいい。どんな怠け者にも。

「懼るな、ただ信ぜよ」

とは、

「こわいことはないぞ」

という日本語がいいね、「おそろな」でなくて。

「ちつとも恐いことはないぞ。私を受けとれ」

ということです。

³⁷ かくてペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネの他は、ともに往く事を誰にも許し給わず。

この三人の三羽鳥みたいな弟子、これだけはキリストを受けとっていますから、直ちに従った連中だから。それは、キリストが祈る時に、その場を見せてやりたいし、彼らに力を与えてやりたいし、そういう意味です。疑う奴は、余計な別の波動がくるから、そんなのは要らない。

³⁸ 彼ら会堂司^{つかさ}の家^{きた}に来る。イエス多くの人の、いたく泣きつ叫びつする騒ぎ



を見、³⁹入りて言い給う『なんぞ騒ぎ、かつ泣くか、幼児は死にたるにあらず、寝ねたるなり』

「騒ぐことも泣くこともない、幼児は死んだんじゃない、寝ただけのはなしだ」と。大変なひとだ。けれども、相対的な現象としては本当に死んでいる現象なんだ。

⁴⁰人々イエスを嘲笑う。

何かちよつと気違いじゃないかと。そりや、彼らとは気が違う。

イエス彼等をみな外に出し、

そんな奴がいたら邪魔だからね。

幼児の父と母と己に伴える者とを牽きつれて、幼児のおる処に入り、⁴¹幼児の手を執りて『タリタ、クミ』と言い給う。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。

「クミ」というのは、命令の女性単数形です。アラミ語です。「クーム」とか「シューブ」とかは非常に大事な字だ。「立ち上がる」とか、「立ち帰る」とかいう字です。これも「直ちに」だ。

⁴²直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりければなり。彼ら直ちにいたく驚きおどろけり。

キリストの在るところには、恐れも疑いも要らん世界です。

この日本という国は、入学試験なんてのをしょっちゅうやっている。そうすると、お母さんやお父さんが心配して、心配が子供に移る。そして、試験に失敗する。私のときは、中学の入学試験は六倍だった。私の兄貴が

「大丈夫だ。受ける奴は皆ばかだと思え。心配するな」

と言った。私は、その励ましで受けた。私の兄貴は勇ましいから。それは、非常に大事なことです。お父さんお母さんが心配したらダメ。

「落ちたつていい。全力を尽くせ。結果なんかどうでもいいぞ」

というくらいの気持ちで励ましてやる。大事なことは普段からの実力です。結局、実力がものを言うから。

キリストが持つてらっしゃるみ霊の力は、とうていケタ違いです。預言者がこれをとても望んでいたけれども持たなかった。使徒たちは頂いた、使徒行伝にあるとおり。だけでも、福音書のキリストにはとてもかなわない。

●故里に入れられず

今度は6章にいけます。これはダメなことがはつきり書いてある。己が郷里のナザレに、弟子たちもついて行つた。安息日になつて会堂でもつて教えた。聞いている者は多くは驚いた。ところが、



「この人はこれらのことをどこから得たか。別にシナゴークでというわけでもなからう」

と。あの当時は、シナゴークは学校みたいな所だけれども、ユダヤの教会です。

² この人の授けられたる智慧は何ぞ、その手にて為すかくのごとき能力あるわがは何ぞ。

「どうしたことか。悪鬼にとらわれているんじゃないか」

くらいの事は思うんだ。

「あれは大工の子じゃないか。ヨセフの、マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟の、みんな鼻たらしの仲間じゃないか。姉妹もここにいる」

と。みんな、肉的な関係を思つて、

「イエスはどうして？ これはおかしいな」

と。面白いね、あるがままに書いてあるから。もう、ヨセフもマリヤもあつたもんじゃない。

³ ……ついに彼に躓けり。

全く躓いた。

⁴ イエス彼らに言い給う『預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』

という、逆の言い方です。外では尊ばれるが、内ではダメだと。内のやつが一番分らない。そうなんだよな、大体。いわゆる親しい人ほど分らない。

「預言者は故里に入られず」

と。それで、ナザレを出てしまった。ここでは、みんな疑っているから、キリストは

「能力ある業をも行い給うこと能わす」

と書いてある。これは物理法則じゃない。霊の法則の世界は、相手が拒んだら、それは審かれる。働かないということは、拒んでいる奴が審かれているということです。サタンの手下になっている。だから、

「汝の信仰、汝を救えり」

ということになる。

「お前が私を然りと受けとつたことが、救いとなつたよ」

と。ところが、「然り」と受けとらないんだ、このナザレの連中は。だから、力が働かない。働いても、はねっ返つてきてしまう。ということは、相手は救いの世界から自分でこぼれていく。自分で自分を審いている。

「不信仰が最大の罪だ」

とルターも言いましたが、その通り。受けとらないことが罪なんです。

「この間違い、あの間違い」

は罪のただ枝葉に過ぎない。一番の罪は神さまを、キリストを受けとらないこと。だから、



福音の世界は「然り^{しか}」か「否^{いな}」かという恐ろしい世界です。第三者として傍観して聞いているような世界じゃない。傍観している人はただ傍観者になるだけののはなし。天国も地獄もこれを入れない。地獄の外に出される。ダンテが書いている。

「然りか否かを言えないような無関心的な人間は、第三者の人間は、天国も地獄もこれを入れることを恥とする。そういう、いい加減な人間がいかに多いかに驚いた」
なんて、ダンテが書いている。ダンテの『神曲』の「地獄篇」なんてのは本当に凄いね。

●五つのパンと二つの魚

今度は、

7 また十二弟子を召して、二人ずつ遣わ^{つか}しはじめ、穢^{けが}れし霊を制する権威を与え、⁸ かつ旅のために、杖一つの他は、何をも持たず、糧^{かて}も袋も帯の中に錢をも持たず、

と。いわゆる無銭伝道です。

キリストはこの時に暫時的^{ざんじ}に力を与えた。けれども、その力は続きません。聖霊を本当に受けているのではないから。暫時的に受けたが、これは蓄電池式だから。

「本当に受けとるのは、私が向こう側に行つてからだ。それは、私が十字架にかかつて、贖罪を果たしたら、祈つて待つていろ、今度は聖霊が本当に入つて来るぞ」と、キリストは言われた。これはその予表的なやり方です。

「何処にても汝を受けず、また汝に聞かなかつたら、そこを出て行け。出ていく時には、証のために足の裏の塵を払え」

なんて面白いことが書いてある。

その後にヘロデヤ、サロメのことが書いてある。ヨハネが殺されたわけです。

その次に、五千人を養い給うということが書いてある。まあ大変なもんだ。五千人と四千人と二つあります。二通りあつたわけです。

31 イエス言い給う『なんじら人を避け、寂^{さび}しき処^{ところ}に、いざ来^{きた}りて暫^{しば}し息^{いこ}え』

これは、ちょっと休んだはなしだ。

「寂しい処にいく」

というのは、もちろんキリストは祈り、神の懷の中に自分を入れて、祈りで神さまの力にあずかる。湖の上を涉^{わた}つていった時もそうです。

34 イエス出でて、大いなる群衆を見、その牧^かう者なき羊の如くなるをいたく憫^{あわれ}みて、多くの事を教えはじめ給う。

「もう遅いから、まわりの里に行つて食物を買ひましょう」

なんて弟子が言ったら、

37 答えて言い給う『なんじら食物を与えよ』弟子たち言う『われら往きて二百



デナリのパンを買い、これに与えて食わすべきか』

それでも、本当はとも間に合わないです。

38 イエス言い給う『パン幾つあるか、往きて見よ』彼ら見て言う『五つ、また魚二つあり』

「みんな、そこに組をつくつて、青草の上に坐らせろ」と。

40 或いは百人、あるいは五十人、畝のごとく列びて坐す。

大変なもんだ。

41 イエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子たちに付して人々の前に置かしめ、二つの魚をも人毎に分け給う。

余ったのが、

43 パンの余り、魚の残りを集めしに、十二の籠に満ちたり。44 パンを食いたる男は五千人なりき。

大変なことだ。男だけで五千人。五千人以上の人がいて、これは、どうしたんですか。こんな驚くべきことは、全く降参もいとこだ。いろんな解釈がある、私は知ってます。私は馬鹿げた解釈なんかしないんだ。学者というのは馬鹿げたことを考えるから。

「本当はみんな一つずつ持っていた。例えば、五つと二つをそこに出しただけのはなしだ」

なんてなことを言う。冗談じゃない。

キリストが、彼自身が、無限無量食物である。

「我を食え」

と。神さまの創造の力、愛の創造の力が、ここに本当に現れている。

四千人の場合が、もう一つ出ている。その時は十くらいあったかな。この五千人の記事は、何もマルコ伝に限らない。マタイ伝にもルカ伝にもヨハネ伝にも書いてある。

●我なり、懼るな

それからまた今度は、湖上を歩み給うことが出ている。今日の表題の、

『心安かれ、我なり、懼るな』

というのは、これから読む所です。

45 イエス直ちに、弟子たちを強いて舟に乗らせ、自ら群衆を返す間に、彼方なるベッサイダに先に往かしむ。46 群衆に別れてのち、祈らんとて山にゆき給う。

パンを五千人にあげた、もの凄い大奇蹟をなさった後で、また祈つて、山にいらつしやると、47 夕になりて、舟は海の真中にあり、イエスはひとり陸に在す。48 風逆らうに因りて、弟子たちの漕ぎ煩うを見て、夜明けの四時ごろ、



キリストは夜中までグーツと深く祈り入っておられた。

私は眠る時にパツと祈つて寝るでしょ。そうすると、その祈りに関連したことをよく夢の中で見る。しかも、明け方に近い頃に。集会をする前に、もう集会をしてしまった夢を見たり。とにかく不思議でしょうがない。向こう側に行つた人とありありと話をしたり。大体みんなニコニコしているよ。

⁴⁸ 海の上を歩み、その許に到りて、往き過ぎんとし給う。⁴⁹ 弟子たちその海の

上を歩み給うを見、変化の者ならんと思ひて叫ぶ。

「変化の者ならんと思ひて叫ぶ」

と、その通り書いてある。

「これはおかしいな。何だあれば、幽霊かな」

と、心騒ぐ。この弟子たちというのはまだ、波や風みたいなんだ。まだ、聖霊を受けないから。せっかく遣わされたようなことをやつても、あいかわらずなんだ。

⁵⁰ 皆これを見て心騒ぎたるに由る。イエス直ちに彼らに語りて言い給う『心

安かれ、我なり、懼るな』⁵¹ かくて弟子たちの許にゆき、舟に登り給えば、

風やみたり。

ここにも書いてある。

「イエス直ちに彼らに語りて言い給う、心安かれ、我なり、懼るな」

これは大事な言葉です。この「心安かれ」という言葉は「シャローム」じゃない。

「勇気を持て」

というような意味の言葉です。

「元氣を出せ、しっかりしろ」

とか。日本語の「しっかりしろ」が一番いいかも知れない。

「大丈夫だよ。私だよ、恐いことはないぞ」

と。「恐れるな」じゃなくて、「恐いことはないぞ」でいい。ギリシャ語の言い方は「恐れるな」という言い方ですけれども。

「しっかりしろ、私だ。恐いことはないぞ」

「私だから、しっかりさせてやるぞ」

ということだ、逆に言う。一番大事な言葉はこの

「我なり」

なんです。一番まんなかの「我なり」が一番大事な言葉です、上と下の説明より。もう「我なり」で沢山なんです。

「私だよ」

「おお、主さまでしたか」

と。



「我なり」（エゴ エイミ）
ということ。

●神然たる我

「エゴイズム」というのは悪い言葉だが、キリストの「エゴ」は違うんだ。エゴイズムというのは、利己主義、自我主義、これが「罪」なんです。

ところが、キリストの「エゴ」、

「我なり」（エゴ エイミ）

という――ヘブライ語の「アニー」とか「アノヒー」という字――この「我なり」はもう神然たる「我なり」だ。「神然」なんていう言葉は初めてだな。キリストは神然たる人物ですから。

「自然・霊然・神然」

というわけだ。「聖霊の我」なんです。「神なる我」なんです。ヨハネ伝に書いてある、

「お前たちを神々であるといつて、なぜわるいか」

と。詩篇82篇に書いてある。というのは、キリストは

「神の似姿に造られた者を神といつて何がわるいか」

と言っている。今の神学者には分からね、そういうのは。

「神の似姿に造られている」

という、ああいう言葉はもちろんゲーテは好きなんです。

ゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』の「遍歴時代」の終わりの方に出ているけれども、

「畏敬（エアフルヒト）」というものに、四種類ある。

「上なるものに対する畏敬の念、

同等なるものに対する畏敬の念、

下なるものに対する畏敬の念、

自分自身に対する畏敬の念。」

そして、最後に、

「これらが渾然としているのが本当の姿だ、本当の畏敬だ」

ということ。さすがはゲーテだ。下なるものとは、キリスト教がそうなんです。しもべの姿をしている。普通の民族神はみんな上なるものです。内なるものに対する畏敬というのは、

「天上天下唯我独尊」
ゆいがどくそん

の、あれがうちなるものに、我なるものに、我が内なるものに対する畏敬の念ということ。

「己自身に対する畏敬の念」

と、ゲーテは言っている。こういう言葉はクリスチャンが躰く。「神・自然・我」というも



のが融合の境地に、ゲエテという大詩人は入っているから。

「自分自身に対する畏敬」

ということとは、神の似姿に造られている本来の我というものは「神性」（ゴットハイト）を持つている。それは我々の福音の角度からいえば、我がうちなる聖霊に対する畏敬の念です。この「我なり」はキリストはそういう

「神然たる我」

です。だから、「キリスト」「主さま」という。

ペテロが

「我を見よ」

と言った。パウロもいった。「我を見よ」は正に、

「わがうちなるキリストを見よ」

だ。「我を見よ」というので、何かくれるかと思ったら、

「我がうちなるものを汝に与う。イエス・キリストの名において歩め」

と言ったら、生まれつきの跛者^{あしなえ}が歩みだしたじゃないですか。ペテロはまさにその証びとだ。そういう「我なり」という角度の信仰が今、無いんです、プロテスタントも。カトリックの第一級の、例えばザビエルみたいな人はそれが言える人だった。凄いよ、あのザビエルというのは。とてもプロテスタントには、ザビエルとかアッシジのフランチェスコみたいな気宇の人はちよつとない。ウエスレーもかなわない。ウエスレーも凄いけれども。ルターもかなわない。ルターもだいいいけれども。あのへんはやっぱりカトリックの方が上だ。インドのサンダー・シングとか。

そういう「我なり」だ。だから、平伏した時に「我なり」という、

「私だよ」

という声を聞かなくては。そうしたら、俄然、力が来てしまう。そして、今度はこっちがなる。

「我なり」

祈りに於ての確信は、そうなんです。力が来ているから。ただキリストにお願いばかりじゃない。お願いすると同時に、もうこちら側に与える力が来ている。確信ならざる確信が来てしまっている。

「心安かれ、我なり、懼るな」^{おそ}

と、これは私は大好きな言葉なんだ。いろんな事にでつくわします、いいですよ。

「心配するな、私だよ」

と。そして、夜よく寝てくださいよ。「眠られない」なんていうことではない。『眠られぬ夜のために』なんて、ヒルテューはそんな意味で使っているんじゃない。

「よく眠れるために」



ということだ。

睡眠は、ただ時間の長短じゃない。キリストの中に深く眠り入ることです。私みたいに
なると、歳も歳だから、六時間寝れば大抵いいけれども。何時間でもいいよ、とにかく、
キリストの中に本当に祈り眠り入ること。祈り入り、眠り入る。どんな時でも、

「我なり、懼るな」

でもって、立ち向かってください。人の思惑をいろいろな心配したり、

「どう思われるだろうか、どう扱われるだろうか」

と、そんな事はひとつも心配いらぬ。何と思われたっていいんだ。

●即信の福音

⁵³遂に渡りてゲネサレの地に著き、舟がかりす。⁵⁴舟より上がりしに、人々た
だちにイエスを認めて、

これも「直ちに」だ、

⁵⁵あまねくあたりを馳せまわり、その在すと聞く処々に、患う者を床のまま
につれ来る。⁵⁶その到りたもう処には、村にても、町にても、里にても、病
める者を市場におきて、御衣の総にだに触らしめ給わんことを願う。触わり
し者は、みな医されたり。

キリストの救った現象は数知れないんだ。二千光年の彼方の星から凄い望遠鏡で見たら、
キリストが見えるよ。そして、この光景もみんな見えてくる。そんなバカなこと考えてい
る(笑)。

今、見ている星なんてのは、みんな何百年、何千年、何万年前の星の光を見て、今光つ
ているなんて思っ見てるんだ。天文学だってそうだ。天文学で見ている光はみんな、何
万光年なんていうのは、昔の光を見ている。だから、今はどうなっているか分からない。
天文学というのは過去の光の学問なんだ。まあ、それはある程度は、いろいろな物理的計算
で今でも分かるんでしょけれども。

それから、スロ・フェニキアの女のこと、カナンの女のこと、7章のところに書いてある。

²⁵ここに穢れし靈に憑かれたる稚なき娘をもてる女、直ちにイエスの事をき
き、来りて御足の許に平伏す。

「平伏す」とよく出てくる。我々の信仰の姿が、この平伏しのすがたです。まるで昔の封
建時代みたいだな。「下に寄れ、頭が高いぞ」なんて(笑)。時代劇みたいだ。あのテレビの
『水戸黄門』なんか見てないのか、みんな。私はあれが好きで、バカになって見ている。平
伏す人は本当に立ち上げられる。傲然としている人は、今度は逆にひっくり返される。

²⁶この女はギリシャ人にて、スロ・フェニキアの生なり。その娘より悪鬼を
逐い出し給わんことを請う。²⁷イエス言い給う『まず子供に飽かしむべし、



子供のパンをとりて小犬に投げ与うるは善からず』

「自分の子供」、即ち

「イスラエルの人の為に私はあるんだ。それを異邦人のためにやるわけにいかん」

と。キリストは多少、お国的な気持ちでもつてものを言われた。今はキリストはそんなところに行かなくなつていいんだけれども。

²⁸女こたえて言う『然り主よ、食卓の下の小犬も子供の食屑たべくずを食うなり』²⁹イ

エス言い給う『なんじの此の言によりて安んじて往け、悪鬼は既に娘より出たり』

キリストは本当に、

「パンくずでもいいから下さい」

という、その心根に感動されたわけです。

「安んじて往け、悪鬼は既に娘より出た」

と言われた。「安んじて往け」と言つたその言葉でもつて、もう悪鬼は出てしまった。大変なことだ。これも「直ちに」「即」の世界だ。

³⁰女、家に帰りて見るに、子は寝台の上に臥し、悪鬼は既に出でたり。

このフェニキア、カナンカナンの女の一言が、本当にキリストを全的に受けとっているから、キリストは参つたんだ。キリストが参つたのはこの女性だけです。キリストはすぐ受けとらなかつた。

「そんな異邦人なんかは後回しだ」

てなわけで。

「後回しじゃありませんよ、お願いします、パンくずでもいいから」

と。それで、キリストが喜ばれたんだ、100%。

「安んじて往け、安心して行け」

と。もうこれでもつて相手は悪鬼が出てしまつてゐるんだから、大変な方です、キリストという方は。とにかく、福音書でそういう驚くべきキリストということに驚嘆驚倒して、圧倒されてください。

「もう、どんなことがあつても絶対に行き詰まりません」

というところに来るのが、本当の信の世界、即信の世界です。キリストに対して即信の世界で進む。即信、即行となる。だから、昨日は

「即行の福音」

だけれども、今度は、

「即信の福音」

と言つたつていい。速いんだ、これはすべて。間髪を入れずという。

「タリタ、クミ！（少女よ、起きよ！）」



「ラザロよ、起きよ!」

「安んぜよ!」

「鎮まれ!」
しず

たとえば、鎮まつてしまう。みんなそういう世界です。これが御霊の、聖霊の力です。

●キリストの無者

「即」は、もう少し言いますと、ただ時間的なことばかりを私は言っているんじゃない。質的に即なんです。

「それは何秒の何分の一ですか」

と、そんなことをすぐ科学的に考えたってダメだ。即は質的な即ですから。要するに、キリストとは離れない世界なんです、こつちが離れようとしたって。

私たちは空気から離れられないでしょ。しょっちゅう空気に接しているし、無意識に空気を吸っている。キリストの「気」の世界に、キリストの力ある「言」の世界に、キリストの力ある「行」の世界に、自分が溶け込んでいるような、それが本当の無者の姿になる。こつち側に何も無い。

「我もなく、世もなし。ただキリスト、主のみ在^{いま}せり」

という讃美歌の言葉のとおり。

「私はキリストの無者でございます」

と、こんなことを言うもんだから、普通は私は躓きになるんだ。けれども、キリストの現実、彼自身の現実がそういう現実だから仕方ない。神さまの他に、キリストは自分はいないんだから。神さまが乗り移ってしまったて、聖霊が充滿して、溢れてしようがないんだから。

「なぜ、私を善いと言うか。神のほか善きものなし」

と、これは、もう少し後の10章の所に出てくる。

パウロも聖霊の力に満ちています。コリント前書第1、2章に、

「それ十字架の言^{ことば}は亡^なぶる者には愚かなれど、救^{すく}わるる我^{われ}らには神の能力^{ちから}なり。」(コリント前1・18)

「召^よされたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも神の能力^{ちから}、また神の智慧たるキリストなり。」(コリント前1・24)

「わが談話も宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼^よらん為^{ため}なり。」(コリント前2・4～5)

と、いろいろ言葉が出てくる。こういうように、パウロはキリストの力にあふれて書翰を書かざるを得ない。その力の焦点のところに今晚の祈禱会が入って行きます。それでは祈りましょう。

